
ツレヤん...？

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツレヤん・・・？

【Nコード】

N0274BA

【作者名】

y u n a g i

【あらすじ】

入院中だったミカエルこと新堂慎は仲間たちに退院祝いの飲み会の席を設けられてそれに参加するが、途中で気絶してしまい宴は即、幕を閉じる。その翌日、慎は久しぶりに登校する私立夕凧学園に妹の新堂杏を背負いながら向かう。その道中、友人である菅谷涼や幼馴染である摺木麻耶と再会するのだが……。

ブローグ〜ヒーロー凱旋〜 前篇 其の一

——市内某所。

人々が賑わいを見せる繁華街……。

仕事帰りのサラリーマンなどが居酒屋に立ち寄り、酒を飲みながら談笑を交わす騒がしい場所から少し離れた路地裏には一見さんにははばかられる一軒のバーがあった。

Broken Angel Wings（翼が折れた天使）と怪しく光るネオン看板が軒先に下げられ、クリスマスでもあるまいし色鮮やかに光の装飾が施された外装のバーにぞろぞろと入って行く不審な人物たちがいた。

その者たちは服装こそパーカーやらスーツ、ドレスと統一性がなにももの一つだけ共通点があった。それは彼らの服装のどこかには必ず白い翼のブローチが付いていた。

彼らはバーに入るすでの所で持参した仮面を付けて店内に入って行く。傍から見れば仮装パーティーの参加者たちに見えなくもないメンツである。

店内は薄暗く、カウンター席とテーブル席があり、パーティーをするには少々狭いフロアながらも先着順から空いている席に通され残った者は案の定、立ち飲みとなった。

人でひしめきあう店内だったが一席だけ——テーブル席が空いているにも関わらず誰もそこには座ろうとはしなかった。誰かのために残しているような風にも見受けられる。

そのテーブル席の傍には演壇があり、各々好きな飲み物を手に取った者が次々と演壇に熱い視線を送り始める。特に何かがあるわけでもないそこに視線を向ける必要があるのだろうか？

すると、突然店内が真っ暗になり来場者たちが少しざわめき始める。それを見計らって演壇に向けてスポットライトが照らされ、何

かに気付いた来場者たちは歓喜して店内が少し揺れ動いた……。スポットライトの先には白と黒の対極的な色ながらも左右対称で目元には水滴模様が描かれた仮面を付け、白いワイシャツに白い翼のブローチを身に付けるその下にはジーンズというラフな格好をした人物が立っていた。

仮面の人物は歓喜に沸いた来場者たちをなだめようと両手を小さく上下に動かして、キザな対応をとる。

しばらくして、店内は静寂に包まれて仮面の人物は自分の姿を後方にいる者にも見せつけようと演壇の縁まで足を運んで丁寧にお辞儀をして、徐に口を開いた。

「——皆さんお久しぶりです。無事、この地に舞い降りる事が出来てこれも皆さんのおかげだと思います。ありがとうございます」

静かにそう語ると来場者たちのボルテージが再び上がって店内がまた揺れ動く。仮面の人物は再び来場者たちをなだめて制止させる。

「——ゴホン、えっと……まどろっこしい事はナシにして皆でパ——っとやりましょう！ かんぱ——い！」

右手に持っていた何も入っていないグラスを掲げて乾杯の音頭を取ると来場者たちも仮面の人物に釣られて一斉に「乾杯！」と嬉しそうに告げた後に飲み物を一気に飲み干して各々談笑に入った。

仮面の人物はゆっくりとした足取りで演壇を後にして、演壇の傍にある——彼のために空けられていたテーブル席に腰を掛けると小さく息を吐いた。

久しぶりの集会で緊張していただけにボ口を出さずに無事終えてホッとしたようだ。

「お帰りなさい、ミカエル」

テーブル席に腰掛ける仮面の人物の事を「ミカエル」と呼んで何のためらいもなく隣に腰を掛けたボブカットの少女は蝶をモチーフにした仮面を付け、服装もどこかの制服なのだろうか、セーラー服の上にエプロンを着用していた。

少女はさり気なくミカエルと呼んだ人物の前に飲み物が入ったグラスを置き、それにミカエルは手を伸ばして飲み物を口に含んだ。すると、ミカエルが突然、飲み物を勢い良く嘔き零して苦しそうにむせ返る。

「……コレ、何？」

「健康ドリンク？」

「何故に疑問形？」

「いや、お——マスターが『祝いだ、持ってけ』って……」

少し申し訳なさそうに語りながら少女は自分たちが座るテーブル席の向かい側にあるバーカウンターに視線を向け、ミカエルも少女に釣られるように視線を向けた。

視線の先にあるバーカウンターには雑貨屋によくある定番の髭メガネを付け、親指を立てて口元を緩め白い歯を光らせる中年男性がいた。

そんな中年男性の姿に二人は額を押えて大きく嘆息をした。

「で、コレの中身は何？」

「……知りたいの？」

「いや、やっぱやめとくわ。世の中には知らなくても良い事があるもん……」

「うん、私もそれには同感……」

意見が合った二人は謎の液体が入ったグラスに視線を向けて凝視した。

グラスに入った液体は無色透明で一見普通の飲料水に見えなくもない代物なのだが、先ほどの事があるので普通の飲料水ではないのは明らかだった……。

「でもさ、飲む前に気付かない？」

「え？ 何が？」

「コレ、結構臭いよ……」

顔を引きずりながら徐に鼻を摘む少女にミカエルは首を傾げる。

「生憎、鼻が詰まって良く分からん」

「そう。それは不運と言うべきか幸運と言うべきか悩む所ね」

「そんなにヤバイ匂いなのか？」

「うん。ミカエルが話す度に匂いが来るよ」

「マジか。それは……うん、ごめんなさい」

「いやいや、こちらこそ何かごめんなさい」

互いにお辞儀の応酬でしばらく変な流れが続いた。談笑していた来場者たちもそのおかしな光景に気付いて、怪しげな笑みを浮かべながら二人のやりとりを見つめる。ニヤニヤと自分たちを見つめる視線に気付いた二人は頭を掻いて照れながら苦笑いをした……。

すると、仕様もない所をメンバーに見られてしまったミカエルが名誉挽回と言わんばかりに突然、グラスを手にとって立ち上がった。その行動に来場者たちは湧いたが少女だけは違った。ミカエルが手に取ったグラスは未だに原材料が分からない物を使用して作られたあの謎の液体が入ったグラスだった。そして、ミカエルがこれから何をしようとしているのかは流れる的に理解出来ている少女は少し顔を引きずりながらも心配な眼差しで彼を見つめる。

『一気！ 一気！ 一気！』

手拍子を交えながら一気コールが店内に響き渡る。

その勢いに身を委ねてミカエルは謎の液体が入ったグラスを口元に近づけるとためらう事なく口に含んで、喉を鳴らしながら一気に飲み干した。飲み干して空になったグラスを掲げると店内は歓声に包まれて、ミカエルは口元を緩める……。

会場の反応に安心したのか——突然、ミカエルはグラスを掲げたまま前方のテーブルに倒れ伏せる。卓上の物は全てその衝撃で転げ落ち、床一面に飲料水が飛散した。

唐突の事で呆気に取りられた面々だったが、良く見るとミカエルの身体が小刻みに震えており、痙攣している事に気付く。

『ミカエルーっ？』

店内に悲鳴が響き渡り、飲み会どころじゃなくなってしまい。久しぶりの集会は早々に打ち切られたのであった……。

ブローグ〜ヒーロー凱旋〜 前篇 其の二

——ミカエルさんが来場しました。

ミカエル「こんばんは〜」

ラファエル「こんこん」

ガブリエル「こんばんみ〜」

ガブリエル「今日、ミカエル再臨祭があつたんでしょ？ どうだった？」

ラファエル「どうもこうも……」

ミカエル「……」

ガブリエル「？」

ラファエル「マスター特製ドリンクを調子付いて一気飲みし、気絶しましたよ。折角の集会がパーです」

ガブリエル「それはそれは、思い切った事をしなさった……」

ミカエル「……すまん」

ラファエル「まあ〜いいですけど……。それよりもガブリエルさんはどうして来なかつたんですか？」

ガブリエル「そうだね〜。おんにゃによ子が離してくれなかつたんだよねえ〜」

ラファエル「……またですか」

ガブリエル「仕様がないつしよ。だって、モテんだもん」

ラファエル「はいはい……」

ガブリエル「まあ〜あれだよ。ミカエルくん、無事でなによりラファエル「うん、お帰り」

ミカエル「何だよ、改まってさ。キモいわ」

ガブリエル「素直じゃないねえ〜」

ラファエル「でも、ミカエルらしいでしょ？」

ガブリエル「確かに……」

ミカエル「馬鹿にされているような気がするが……。でも、あり

がとう」

ラファエル「w」

ガブリエル「今、悪寒が走ったわ……」

ミカエル「捨てた女の怨念じゃね？」

ラファエル「ああ、それはありえるね」

ガブリエル「……やな事言わないでよ」

ミカエル「www」

ラファエル「www」

ガブリエル「もう、イジメはんだい」

ラファエル「子供ですか……」

ミカエル「さてと、そろそろ……」

ラファエル「そうですね」

ガブリエル「だね」

ミカエル「じゃー明日からまたよろしく」

ラファエル「こちらこそ」

ガブリエル「よろしゅうに」

ミカエル「おやすみ」

ラファエル「おやすみなさい」

ガブリエル「おやす」

——ミカエルさんが退場しました。

——ラファエルさんが退場しました。

——ガブリエルさんが退場しました。

……。

……。

——レヴィアさんが来場しました。

レヴィア「渡さないわたしさないワタサナイ……。絶対に渡さない。必ずアナタを救ってみせる。そして、今度こそ殺す。殺すころすロス。ぜったい、殺してみせるから。だから、だから——もう、どこにも行かないです」と傍にいて……」

——レヴィアさんが退場しました……。

第一話　久しぶりの登校　其の一

身体がダルイ。

いや、身体が重いと言った方が合っているのだろうか？

寝返りを打とうにも身体が思うように動かない。金縛りに遭っている……？

いやいや、そんな非科学的なモノは信じないぞ。それに金縛りつて要は脳が起きているにも関わらず身体がまだ眠った状態で動かない事を指すんだろ？　でも、手だけは動くからこれは金縛りじゃない。だったら、何が原因なんだろうか？　目を開ければその原因が分かるのだろうか？

ふむ、このまま眠り続ける訳にもいかない、か……。

俺は原因を突き止めるべく、ゆっくりと閉じていた目を開ける。

徐々に明らかになって行く瞳に映る景色の中に馬乗りになってこちらを凝視しているセーラー服姿の人物が現れた。

「いにゝ、私を学校に連れてって」

上目遣いで媚びるように開口一番にアホな発言をした、ボサ髪童顔の八重歯が特徴的な小悪魔少女に俺は――開けた目をゆっくり閉じてもう一度寝る事にした。

うん、疲れているんだな、きつと……。だから、この部屋に居やしない少女の姿が見えるんだ。ナンマイダブツナンマイダブツ……。これで少女の霊は報われた事だろう……。

さて、もう一眠り――グホッ！

「いにゝ起きてよゝ。起きないと遅刻するよゝ」

僕の身体の上で馬乗りになっていた少女がなかなか起きない俺に

制裁と言わんばかりに跳ねていた。その反動で少女の全体重が俺の腹部を圧迫する。

「分かった。分かったから腹の上で跳ねんな。吐くぞ、このヤロ」

観念して俺は目を開けて少女に苦言を呈した。

ようやく起きた俺の事を少女——新堂杏しんどうあんは何故か分からないが徐に鼻を手で摘んだ。

「……にいに、臭い」

「これが年頃の少年の匂いだ。臭けりやゝ部屋に入って来るな」
「ぶうゝ」

フグみたいに頬を膨らませて拗ねた杏の膨らんだ頬を驚掴みにして俺は杏が言う悪臭の元であろう口臭を吹きつけてやった。

あまりの臭さに杏の目が充血し、涙を浮かべながら苦悶な表情を浮かべる。だが、悪臭から逃げようにも俺に頬を驚掴みにされて逃げ場を失ってしまった杏はそのまま白目を向き気絶した。

凄い効力だ……。昨日、あれほど噛むタイプのブレスケアを口にしたにも関わらずこれほどの威力を発揮するなんて、俺の身体に一体何があったんだよ……。

俺は小さく息を吐いて肩を落とした。

昨晚、気が付いたら行きつけの店のソファーの上だった。そして何故だか俺の口に三重にしてマスクが付けられていた。

首を傾げながら、マスクを外そうとしたら俺の事を看病していたであろう桜乃美嘉さくのみかに腕を掴み取られて「外しちゃダメ！」と叱られてしまった。

何故、外しちゃなんのか状況を理解出来ない俺に桜乃は優しく微笑み掛けながら俺の手に一箱の噛むタイプのブレスケア（グレープ味）を握らせていた。

俺はどうしてか手中に収めるそれを眺めていると目頭が熱くなってきた。それだけである程度の状況が理解出来たからだ。

……はあ。

俺は未だに腹の上で白目を向いて気絶をしている杏の襟元を掴んで引きずりながら部屋から放り出した。そして、扉を閉めるとドアの上段部分から順番に錠を掛けて行く事——八つ目を掛け終えて、俺はベットにダイブをして横になった。

ふう、これで邪魔者は居なくなった。これで心置きなく、眠れ——ガチャン！

「にいに！ どうしてこんなにも可愛い妹を放り出すかなあ？ 考えられないよ！」

頬を膨らませながら部屋の中にドカドカと激しい足音を立てながら可愛い（？）我が妹が入って来た。

「……どこの世界にピッキングする可愛い妹が居るんだよ」

「ぴつきんぐ？ 何、意味分かんない事を言っているの？ 普通に開けたただだよ」

「じゃ、何だ、その細長い工具の数々は……」

俺は杏が手に持っていた、ピッキングに使用したであろう工具に視線を向けた。指摘された杏は証拠隠滅とばかりにすぐさま工具を懷に隠したがバレバレである。

「ヤダなあ、にいには……。杏は何も持ってないよあ」

「……なら、跳んでみる」

「何、そのカツアゲ的な命令。にいに、怖い」

「そうか……。なら、身体検査だな」

俺は立ち上がって杏に近づいて行った。

「え？」

俺の発言に杏は素っ頓狂な声を上げて間抜け面をさらした。そして、言葉の意味をどう解釈したのか分かりかねるが突然、頬を紅く染め瞳をうるうるとして少し怯えたような視線をこちらに向けて

来た。

「……優しくしてね。にいに」

「はい？」

甘ったるい声で発せられた杏の言葉に僕は首を傾げた。

えっと……どう対応したらいいのかわかん。

「ほら、早く。ここがドクンドクンって、なってるよ。にいに…」

…」

杏は俺の腕を掴むと徐に自らの胸に俺の手を押し当てた。触れられた杏は声を殺して堪えていたが、正直の所そこは何もなく見渡す限り水平線が広がっていた……。

「……ね？ ドクンドクンってなってるでしょ？」

頬を紅く染めて恥ずかしそうな表情を浮かべながら杏は口走った。だけど、

「ああ、そうだなあ。虚しさだけが心に染みる……」

俺は押しつけられていない空いた腕を自分の胸に置いて、猛省した。

言葉の綾（？）とは言え、妹の慎ましい胸を触らせてもらう変態的な流れを作ってしまったし申し訳ない。妹よ、これからだ。これからお前の平地に立派な双丘が出来上がるだろう……。だから、めげずに頑張れよ、杏……。

「……ね、にいに。何で泣ぐんでいるの？」

「それはね。男の子だからさ」

「男の子は女の子の胸を触りながら泣くの？」

「そうだねえ。だけどね、これは神様の不公平さに悲観した涙なんだ」

「不公平さ？」

「そうだよ。こうして女の子（妹だが……）のお胸を触れさせてもらっているのに得るモノがないんだ」

「それって……どういう事？」

「つまり、掴め——グフッ！」

「にいにの馬鹿！ 変態！ モ。ボ。！」

ガチャン！ と杏は扉を勢い良く締め、俺に鳩尾への打撃による痛みだけ残して出て行った……。

ふん、これでいいさ……。その悔しさをバネに立派になるんだぞ、杏……。

杏の攻撃が心にまで響き、俺は膝から床に崩れ落ちてそのまま床に倒れ伏せた。

……。

……。

…… よし、学校に行く準備でもするか。

俺はさっさと起き上がってクローゼットから制服を取り出して着替え、桜乃に渡されたマスクを即身に付け、噛むタイプのブレスケア（オレンジ味）はスクールカバンに忍ばせて自室を後にした。

俺の部屋を怒って出て行った杏が玄関先で靴を履いており、俺の姿を見るや否や舌を出して憎たらしい態度を取って来た。だけど、先に靴を履き終わったにも関わらず座ったまま動こうともしない杏の姿を見て、僕は嘆息をした。

また、か……。

頭を掻きながら俺も靴を履いて、徐に杏が座る前に腰を下ろした。すると、待ってましたと言わんばかりに杏が俺の背中に乗りかかって来て、俺は杏が落ちないよう支えながら立ち上がって背負う形になった。

杏が俺の部屋に忍び込んで目覚めた俺に向かって開口一番に言った言葉通りだ。私を学校に連れてって、つまり俺が杏を背負いながら一緒に登校する事である。

「じゃー出発進行！」

俺の背中ではしゃぎ始めた杏に呆れながら、俺たちは学校に向けて出発した。

外を出てしばらく歩いていると案の定、近所の方々が奇異な視線で俺たち兄妹の事を見つめて来たが、別に気にならなかった。

ほぼ毎日の事で慣れてしまっているからである。ホント、慣れつつ怖いよな……。

だけど、幼い頃からこんな仲睦まじい間柄ではなかった。もう少し、ドライな関係だったと思う。ドライと言っても全く口を利かなかった訳ではない。ここまで身体を密着して接し合う仲までではなかった。

杏が言うには空白の三年間の埋め合わせだそうだ。

ふむ、埋め合わせを補うためにここまでベタベタされちゃ困るんだがな……。一応、血の繋がった兄妹とは言え、お互い年頃の少女なのだから周りの目も気にしてくれ……。

「ねえ……。にいに」

「何だ？」

「昨日、どこに行ってたの？」

「どこだっでもいいだろ？」

「ぶう……。必ず尻尾を掴んでやる」

「……そんな活力があるなら自分の足で学校行けや」

「ゴホン、ゴホン。ごめんね、にいに……。いつも杏の身体を心配して背負ってくれて……。杏、嬉しいよ」

「その病弱キャラはこれで何回目だ？」

「びようじやくきやら？ にいに、酷いよ……。杏が昔から身体が弱いのを知っているくせに、ゴホン……」

「はいはい」

聞き分けのないアホな妹の話を軽く流す事にして俺は黙々と足を進める事にした。俺の華麗なる対応に杏はこれでもかと言うほどにワザとらしく咳き込み始める。背中から聞こえる耳障りな咳を無視しながらしばらく足を進めていると突然、肩をポンと叩かれた。

俺に無視されて痺れを切らした杏が注意を引くためにやったんだ
と思いながら、無視しているとまた肩をポンと叩かれた。先ほどよ
りも強い力だった。

「何だよ、杏」

そう言いながら俺は視線を後ろに向けると杏じゃなくてニヤニヤ
と気色の悪い笑みを浮かべる制服姿の美少年がいた。

「相変わらず、仲がいいねえ。お二人さん」

シヤレた髪形をした茶髪に端正な顔立ち、やや細身のチャラ男こ
と菅谷涼が俺に背負られている杏の頭を撫でる。

涼とは中学の時に知り合い、現在はお互い別々の学校に通ってい
るもののたまにこうして登校時に出くわしたりする。

「お前、時間大丈夫なのか？」

彼が通う学校は僕らのように徒歩で行ける距離じゃなく電車を使
用して行かなきゃならないような場所にある。だから、友人として
悠長に歩く彼の事を少し心配した。

「大丈夫大丈夫。しっかりシフトがオツムに入っているからこの
まま行けばギリギリ間に合う。んな事よりも留年生は大丈夫なのか
い？」

「誰が留年生だ」

「え？ 進級出来たん？」

「まあ〜ギリな……」

「なあ〜んだ。てつきり留年したと思ってたから、慎しんをからかお
うとわざわざ遠回りまでしたってのに、無駄足かね……」

「最低だな、お前……」

はあ〜、と俺は嘆息を吐いた。

俺は別に成績の影響で留年しかかった訳ではない。一年の秋辺り
に入院する事になり出席日数の都合で留年を危ぶまれた。だけど、
前半休まずにがんばったおかげかその貯金でプラマイゼロで事無き

を得る事が出来たのだ。

「でもさ。にいにも不運だよね。襲われた女の子を助けようとして果敢にも首を突っ込んだのは良かったものの、その結果が長期入院に留年ギリセーフの心臓バクバクコースを選んじゃったんだもん」

「杏ちゃん杏ちゃん。その女の子からしたら慎兄ちゃんは正義のヒーロー様だから、あまり言いなさんな。まあ第一、その女の子を襲った犯人様までもかばっちゃうほどのお人良しさんに言ってもしょうがないけどね」

そう言いながら俺の事を怪しんでジト目で見つめて来る涼に俺は堂々とした態度で睨み返した。

「ホント……おっかないな。だけどさ、心配して言っているっただけは分かってちょうだいな。第一、目撃者が慎と――」

「おはよう、新堂くん。杏ちゃん」

と、突然俺たちに挨拶だけを投げかけて少女がスタスタと歩いて行った。

「わお！ これはツイてるね。まさか、あいつ 摺木嬢に会えるとは……」

前方を歩く少女の背中を見つめながら言った涼の頬は緩んでいた。
摺木麻耶、容姿端麗、文武両道。クールな立ち振る舞いとそのルックスから他校生の男子までも虜にするモテモテ美少女だ。

腰の辺りまで伸びた黒のツインテールに前髪も綺麗に均等に整えられ、モデルのようなスレンダーな身体付き。体型にぴたりと合った我が校の制服姿が凛々しく、常に欠かさず身に付けている白色の手套が気品に溢れており、奥床しい乙女然とあまり肌を露出しない彼女は俺の背中にいる寸胴とは大違いである。

摺木と幼馴染の俺としては彼女の著しい成長に少し戸惑ってしまいう事しばしば……。

「ホント、麻耶姉はいつ見ても綺麗だなあ」

摺木の魅力に同性である杏が見惚れてしまったようだ。そんな、我が妹に友人の涼は優しく微笑み掛けながら杏の頭にポンと手を置いた。

「大丈夫さ、杏ちゃん。これから劇的に成長するよ」

「本当？ 涼兄〜！」

「ああ、本当さ。数年したら杏ちゃんもボンキュッボンになるさ」

「キュッキュッキュッじゃなくて？」

「うんにゃ〜。キュッボンキュッじゃなくてね」

『うひひひ〜』

何の笑みか知らんが二人して口元を隠しながら気色の悪い笑み浮かべる。その姿は傍から見ればこれから悪巧みをしようとしている小悪党にしか映らないだろう。

「アウツチ。僕とした事が、摺木嬢の連絡先を聞くのを忘れていた……」

突然、額を押えて涼は悔しそうに口走る。

「いや、涼兄には無理だと思うよ」

「む、今の言葉は聞き捨てならないねえ〜」

「だって、麻耶姉の浮いた話なんて全然聞かないもん。そもそも、男の子には興味がないんじゃないかって、言われているぐらいだよ」

「……お前って、そういう類の話好きだよなあ〜」

確かに摺木の浮いた話なんて聞いた事がなかった。ほとんど、どこぞの有名な男子生徒をこっ酷く振ったやら、同性から告白されたなどの仕様もない噂話が校内では飛び交っている。

「うん！ 噂話は淑女の嗜みってね」

「絶対違うと思うぞ〜」

「僕も同感〜」

「ぶう〜ぶう〜」

自論を否定されて拗ねてしまった杏をスルーする対応に至った俺

たちは途中まで一緒に登校し、しばらく進んだ先にある交差点で涼は駅がある方向へ、俺たち兄妹は学校がある方向に別れて、各々が通う学校に向かった……。

第一話　久しぶりの登校　其の二

——私立夕風学園。

小中高の一貫校でエスカレーター組と外来組が入り混じる大所帯のマンモス校だ。

校風もかなり自由で法を犯さなければ何でもありである。だから、服装も私服のヤツが居たり俺のようにきっちり制服を着用しているヤツもいる。

妹の杏は今年から晴れて高一なのだが、中一から着ていたセーラー服が未だに着られるので渋々ながら着用している。本当は高等部用の制服（ブレザータイプ）を着たくて両親に駄々をこねたらしいが通用せず現在に至っている。

俺は心身ともに順調に成長を遂げたのでおかげさまで高等部用の制服である。ちなみに中等部用の制服は学ランとセーラー服で初等部用の制服はお坊っちゃま、お嬢様が着用するようなごんまりとした物だ。

杏を背負っている俺はまず、杏を自身の教室に送り届ける事にした。いや、送り届けなければ周りにいる生徒達からの熱烈な視線が解除されない。

全く、モテる男はつらいぜ……。

少し照れながら杏の教室に向かっているとバリバリと何かを頼張る音が聞こえた。

まさかな……。

「なあ、それおいしいか？」

「ふおいふいよ」

「ああ？　もう一回言ってみる」

「——ゴクン。おいしいよ」

陽気な返答に俺は少し立ち眩みを覚えた。

人に背負わせておいて自分はお気楽に食事と来た。それはそれは……食べカスが服に付着している事だろうなあ。

「お客さん。申し訳ないんですが、車内は飲食禁止なんでね」。

お控願えますか？」

「モウマンターイー！」

「こっちは問題ありだ！　　ったく、着いたぞ」

仕返しとばかりに俺は杏を支えていた腕を解いて、そのまま振り落とした。杏は突然の事でそのまま廊下に尻餅をついて「ふぎゃ！」と奇声を上げる。そんな杏の姿はデイベアに見えなくもなかった。

「にいに、酷い」

強打した臀部を労わりながら立ち上がった杏に少し睨まれたが俺は悪怯れる事無く、その様を鼻で笑って軽くあしらってやった。

「いーだ！」

ガキみたいな事を言い残して杏は自身の教室である一年三組に入って行った。それを見送った俺は小さく息を吐く。

やっと、解放されてホッとした。これで心置きなく自由な行動がとれる。腕を頭上に掲げて伸びをしながら俺は自身の教室——二年二組へと向かった……。

——私立夕風学園、高等部校舎三階。

俺が二年二組の教室に入るや否や、突然クラッカーの音が鳴り響いた。

『退院おめでとぅ』

クラスメイトたちが退院して久しぶりに登校する俺に向かってそんな言葉を投げかけて来た。

正直、突然の事で頭が真っ白になったが状況を呑み込めるようになった瞬間、顔が熱くなる。

「あ、ありがとう……」

照れのせいで少し口ごもったが言いたい事を言えたと思う。だけど、どうして俺が入院していた事を知っているのだろうか？ 一年の時の同級生が口を滑らして話してしまったのだろうか？

ふむ、考えてもしょうがないか。ここはありがたく気持ちを素直に受け取るとしよう。

すると、小柄のなよなよした女々しい男子生徒がか細い声で「こ、こちらへどうぞ」と俺の事を誘導し始めた。その男子生徒のご厚意に甘える事にした俺は誘導された席（教室のちょうど中央）に向かい腰をゆっくりと下ろす。

正直の所、助かった……。どこのクラスに編成されたかは知っていたが、席までは知らなかった。さっきの男子生徒に感謝しよう。

席に着いた俺は机に肘を置いて、それを顔の支えにして今日一日、ボーっと過ごす事に決めたのであった……。途中、俺のマスク姿を心配してかクラスメイトたちから色々な物を贈呈されたが——決してカツアゲをした訳ではない事をここに誓う。

昼食時になり、俺の机には贈呈された様々な物で溢れ返っていた。全体を占める割合はスナック菓子が六割、デザート類が二割、軽食飲料水が一割、その他（思春期男子の必須アイテム）一割だ。

どう処分していいものかと、ブツを眺めながら考えていると目の前にビニール袋がひらひらと舞い落ちて来て、俺は思わず視線を上に向ける。

視線の先には見慣れた女子生徒が――摺木麻耶が目の前に立っていた。

「えっと、摺木……さん？」

状況が理解出来ずに首を傾げながら彼女に話しかけると何も答える事無く、摺木は徐に卓上に散乱していたその他（思春期男子の必須アイテム）の一つを手にとった。

あっ……。隠すのを忘れていた……。しかも、タイトルが「ロリっ子、大集合！ お兄ちゃん大好き？」と丁寧にサブタイトルまで書かれていた。

うわ……。これまた、誤解を招くようなタイトルの物をお取りになっただな……。

摺木は無表情で何も語る事無く「ロリっ子、大集合」なる本を見続ける。

恥ずかしい！ 恥ずかし過ぎるぞ、おい！ 俺の物じゃないのになんなんだ、この恥ずかしさは！ 誰の物か分からない物のおかげでこちらら羞恥プレイにさらされたぞ、コノヤロー？

最後のページまで見終わったのか摺木は静かに本を閉じて小さく息を吐いた。

「摺木さん、これにはその〴〵色々と言語があつて……」

「分かつているわよ。クラスの男子たちからのお見舞いの品でしょ？ うん、ちゃんと分かつてるから……。でも、もし新堂君がこんな性癖の持ち主だったとしても私は真実をしっかりと受け止めてあげるから……」

分かつたと言っておきながら少し蔑んだような冷たい視線で見つめる摺木に俺は先ほどのビニール袋を手にとり、それを頭から被って顔を隠す。一時的の処置だが摺木の視線から逃れる事に成功し

た。

わあ、辺りが真っ白で何も見えないや。

しかし、俺の安息の時間がすぐに終わりを迎える。摺木が被っていたビニール袋を淡々と引っぺがして心なしか怒っているように見受けられた。

「……新堂くん」

「あつ、はい！ 何でしょうか！」

「コレ、没収ね」

いつのまにか摺木が綺麗に重ねたその他（思春期男子の必須アイテム）を指さして静かに問いかけて来た。

「あつ……い、いいぜ。好きなようにしてくれ！」

「何？ 少し名残惜しいのかしら？」

「い、いえ！ 友人たちの気持ちをムゲにするのが心苦しくて……」

「そう？ でも、没収ね」

「……はい」

返事をするや否や摺木は黙々とその他（思春期男子の必須アイテム）たちを俺の卓上から持ち出して、どこに持って行くのか分からないが教室から出ようとした所で急に立ち止まってこちらを振り向いた。

「新堂くん」

「あつ、はい。何でしょうか？」

「そのプリント、私の代わりに生徒会室に持って行ってくれないかしら？ ほら、私はご覧の通り手が離せないから……」

そう言いながら摺木は視線でプリントの位置を指示した。プリントは黒板前の教卓の上に束になって置かれており、それを見つけた俺は軽く頷いて見せた。

俺の反応を見てから摺木は軽く会釈をして、その他（思春期男子の必須アイテム）たちを持ってどこかに行ってしまった……。

摺木を見届けた後に俺は小さく息を吐いて、肩を落として頂垂る。

アイツも俺と同じクラスだったのか……。何て言うか、格好悪い所を見られたなあ。勘違いしてなかったらいいが……。

不安を抱きながら俺は摺木に頼まれた仕事をするべく立ち上がり、教卓に置かれたプリントの束を持って教室を後にした。

しばらく廊下を歩きながらとある重大な問題に直面する。

生徒会室って……どこだ？

高等部校舎内にあるのか？

それとも部室棟にあるのか？

ふむ、どこにあるのか分からんが……とりあえず中庭にある学校案内の地図を見ればどこにあるか分かる、か……。

俺は高等部校舎を出て。初等部、中等部、高等部の校舎に囲まれて設計された中庭に向かうと、俺が求めていた学校案内の地図を早くも発見する。

俺のように時々迷う輩がいるために造られた地図みたいだが……無駄に広すぎるのがいけないんじゃないのか？

まあ、愚痴を言っても仕方ないか。それにしてもこの中庭は豪勢だよなあ。

学校案内の地図を見つつ、少し辺りを見渡した。

ここの学園の中庭は全校生徒の憩いの場になっており、中庭の中央には噴水。後は綺麗に整えられた芝生や花々が咲き誇る花壇などがあり、庭園のようになっている。その近くには学食兼カフェがあったりする。

昼のポカポカ陽気時には昼食を食べ終わった生徒たちが芝生の上で昼寝をしたり、談笑したりと人で賑わいをみせている。かくいう俺も昼食後にはここに来て噴水前のベンチでお世話になる事がある。良く眠れるせいか、たまに夕刻時まで眠っていた事がある。あの時はさすがにビビって少しの間ここに来るのを自粛していた時期があった。

ふむ、今となつては良い思い出である。

俺は学校案内の地図で生徒会室の位置を確認する。生徒会室は時計塔にあるらしく俺は時計塔を目指す事にした。

しかし、よりにもよつて時計塔か……

小学生の頃、初等部校舎から見えた少し古ぼけた大きな建物に興味本位で近づいて行つた俺はそれに見惚れていると、地響きのような大きな鐘の音が突然鳴つたものだから驚いてしまった。その際、足がすくんでしまいしばらくその場から動けなくなつたのを覚えている。

間近であの鐘の音を――それも小学生の頃に聞けば、そりゃー獰猛な化け物が吠えたとか勘違いしてしまうだろ。

はあゝ今となつてはこれも良い思い出……なのか？

ああ、もう！

俺は恥ずかしい思い出をさつさとかき消す為に頭を掻いた。

だけど、消そうとする度に鮮明にその恥ずかしい記憶がよみがえってくる。そして、俺が消そうと必死になるにつれて周りで談笑していた生徒たちが徐々にではあつたが遠退いて行つた……。

これは、アレだよな……。色々勘違いされてそうだ……。一人だけマスクをして目立つ中、さらに必死の形相で頭を掻くなんて動作は誰がどう見ても奇行にしか見えん。

今日は厄日、なのか……？

がつくし、と肩を落とした俺はとぼとぼ歩きながら時計塔に向かってしていると前方の道端に黒い物体が落ちていた。

いや、倒れていた……？

中世的な黒いドレスに身を包む金髪の等身大の人形（？）がうつ伏せで倒れており、周りを歩く生徒たちには見えていないのか全員スルーだった。

ふむ、やはり人形なのだろうか。しかし、誰がこんな物を——ゴ
ロゴロゴロ——！

ん？ 何だ、今の地響きは——雷の音か？

俺は空を見上げて見渡した。だけど、雲一つないピーカン照りだ
った。

あれ？ 聞き間違いか。まあいいや、どうせこれから生徒会室
に行くんだから人形が中庭に不法投棄されている事を報告すれば済
む事だろう。

予定通り俺は時計塔にある生徒会室に向かって足を進める事にし
た。人形を踏まないように気を付けながら歩いて——ボタン！

突然、目の前が真っ暗になりどうしてか鼻がもの凄く痛かった……。
状況を把握するべく辺りを見渡すと俺はどうやら受け身も取ら
ず、ダイレクトで地面に顔から倒れてしまったようだ。

気を付けて歩いていたのにダサいなあ……。

倒れてしまった際に辺りに撒き散らしたプリントを回収し、立ち
上がろうと試みたが足に力が入らなかった。それどころか、自分の
足じゃないように重かった。変に足を挫いてしまったのだろうか？
そう思いながら自分の足に視線を向けると俺の両足にさっきの人
形がしがみついたままうつ伏せになって倒れていた。

何、この状況……。もしかして、これは呪いの人形なのか？ 俺
を地獄に引きずり下ろすために目の前に現れたのか？ それなら
合点がいく。どうして周りの生徒たちがスルーしていたのか。それ
は俺にしか見えない死の代弁者たる死神だからだろう。

何だそうか。俺、今日死ぬのか……。結構、お早いお迎えだなあ
……。

開き直るように俺は天を仰ぎ見た。今まであった様々な映像が頭
の中に流れてこれがフラッシュバックなるモノなのだと理解した。

すると、ゴロゴロゴロ！ と先ほどの地響きが再び聞こえた。
また、か……。でも何の音だろうか？ 辺りを見渡しても地響きが鳴るような物は置いてないし、鐘が鳴る時間でもない——俺はふと、人形に視線を向けた。

まさか、な……。だけど、この人形にしがみつかれている部分が妙に生温かい。人形じゃないのか？

俺は確認するべく、辺りを少し見渡してから見つけた。おあつらえ向きの小枝を掴み取って、人形（？）の頭を突いてみた。突く際は鼻を摘む事を忘れずに……。

「……痛いわ、阿呆……」

うつ伏せのまま覇気のない声を上げた人形——いや、少女……。聞き間違いじゃない事を確認するべく、俺はまた小枝で少女の頭を突いてみた。今度は少し強めに……。

「痛いと言っとうろつが！」

怒号を上げながら顔だけ起こした少女の瞳は綺麗なエメラルドグリーンでそのまま宝石に出来そうなほど澄んだ色で左目を眼帯で隠し、肌も透き通るように白くて本当に人形みたいな風貌の少女だった……。

第一話　久しぶりの登校　其の三

「……お主、なぜ鼻を摘んでおる？」

不思議そうな表情を浮かべながら元人形（？）だった、少女が話しかけて来た。

外人さん——何だろうか？　普通なら俺のナリを見て怒る所だろうに……。それならそれなりの対応を取らねば、な……。

「ああ、この国の風習みたいな物だ。地面に落ちてる物の安全性を確かめる時は鼻を摘みながら小枝で突く、これ常識」

俺は堂々と少女に嘘を吐いてやった。

この嘘に少女は真摯に受け止めてくれたのか「ふむふむ」と感慨深く頷いていた。

「実に滑稽な様よな。我はてつきり我の事を汚物扱いしていたのかと思ったわい」

「ヤダな。そんな失礼な事をする訳なかるうに……」

オーバー気味に俺は顔の前で手を左右に大きく振って否定する。

「そんな事よりも、お前は どうしてこんな道端で寝てたんだ？」

「それがじゃのお。腹が減って動けなくなってしまったのじゃ」

「ああ、それで……」

なるほど……。さっきの地響きもコイツの腹の音って訳か。しかし、化け物染みた音だったよなあ。

「お主。我に何か食わせてくれんかのお。その引き締まったモモ肉でも良いんじゃないが……」

涎を垂らしながら言った少女の視線は強く掴んで離さない俺の足に向けられていた。

ヤバイ……。腹が減り過ぎて幻覚を見ているようだ。このままでは本当に俺の足を食われかねない。どうしたら——って、あっ！
あるじゃないか。おあつらえ向きのブツたちが教室に……。

「分かった。分かったから俺の足を離してくれないかな？ このままだったら動けないだろ？」

「ふむ、承知した。じゃが、条件がある」

「何だ？」

「とんずら防止のためにそのレプリカどもは我が預かる」

「れぷりかども？ ナニソレ」

「分かんやツじゃな。それじゃよ、それ。その魔導書の事じゃ」

少女は顎を使ってその魔導書と呼んだ、俺が手に持つプリントの束を示した。

「ああ、コレか……。分かった。じゃーそのベンチにでも腰掛けて待っててくれ。すぐに戻って来るから」

近くにあったベンチを指さして、少女はそれを見て「承知した」と頷きつつプリントの束を俺から強奪して、少しおぼつかない足取りでベンチに向かい腰掛けた。

ふらふらじゃねえか。はあー全く……。

少女から一時的に解放された俺は頭を掻きながら自身の教室に足早と向かった。

卓上に散乱していたブツたちを摺木から貰い受けたビニール袋に詰めれるだけ詰めまくって、パンパンに弾けんばかり膨れ上がったビニール袋を担いで腹を空かせた少女の元へと戻る。傍から見れば季節外れのサンタクロースに見えなくもない風貌だろうなと思うた。

もし、誰かが俺の姿を見て何かを言ってきたら俺はこう言ってやるんだ「先取りだ、コノヤロー」と……。だけど、誰にも何も言われる事無く少女の元に着いた俺は心なしか侘しさに苛まれた。

「御苦労……って、どうしたのじゃ？」

「いや、現代人って冷たいんだなあ……」

「——この数分の間に何があったのじゃ……」

嘆息交じりに少女は俺が担いで持って来たビニール袋を手に取り、目をキラキラと光らせながら物色し始め、俺は彼女の隣に腰を下ろした。

相当腹が減っていたのだろうパッケージを見ているだけで涎が分泌されて、ジュルジュルと事あるごとにすすっていた。

「なあ、聞いてなかったんだが、お前の名前は？」

「ん？ ああ、イリヤじゃ。イリヤ・シュガーライトじゃ。しかし、これは美味じゃのお」

イリヤはおにぎり（鮭）を頬張りながらそう答えた。

やはり、外人さんだったのか。うん、確かに西洋のお人形さんのようだ。しかし、凄い食欲だな。鮭おにぎりを食べ終わったと思ったら、続けざまにタラコおにぎりを美味しそうに食べ始めた。

だけど、少し疑問が残った。外人さんってのは分かった。でも、ここまで流暢に少し古臭い口調ながらも日本語を話せるとは恐れ入った。

イリヤ・シュガーライト、天才少女なのか？

三つ目のおにぎり（ツナマヨ）を頬張る彼女を横目で眺めながら、俺はある事に気付いて、嬉しさのあまり手をポンと叩く。

「ああ、お前。本当の名前は佐藤光さとつひかるだろ」

この言葉にイリヤは「ブー」と口の中の食べ物をつき出して、涙目になりながら少しむせ返る。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわ、戯け者！ 誰がサトウヒカルじゃ阿呆！」

「いや、シュガーライトなんて変わった名前でしかも流暢に日本語を話すからさ。つい考察しちゃった、テヘ」

「何が『テヘ』じゃ！ おかげで我が食料が台無しになったではないか！」

口周りに米粒を付けながら怒るイリヤの姿が滑稽でもう少しだけ佐藤光ネタでいじってやろうかとイタズラ心に火が点いてしまった。

「白状するなら今の内だぞ。後になって本当はイリヤ・シュガーライトとじゃなくて佐藤光ですなんて表明はやめてくれよ」

「だから！ 我的名前はイリヤ・シュガーライトと何度言ったら——」

「分かってるって。事務所の方針なんだろう？ 厳しいもんな、この業界は……。千葉県出身なのに星人キャラ守らなきゃならんかったりするしな……」

「……何じゃ、そのリアリティーある言い草は……。じゃが、我はセイジンでもなければチバケン出身でもないぞ！」

「分かってるって、関東じゃなくて関西か？ いや、間を取って北海道か？」

「どう間を取ったのか分からんが——言葉から推測するに絶対違うとだけは分かった」

「ふむ、じゃ〜どこなら納得なんだ？ 九州か？ 四国、中国か？」

「……日本以外の選択の余地はないのか？」

「なるほど、外タレって事ね。じゃ〜やはり、お前の出身地は関東か……」

「何故、そうなる？」

「いや、かの有名なコメンテーターも埼玉県出身って話がだな……」

「もう、良い！ お主は根本的に色々と履き違えておる！ 東洋人は皆こうなのか？」

ガブリ、と自棄食いのように包装を取らずにそのままおにぎり（梅）を頬張り、違和感に気付いたイリヤはイライラしながら包装を取って再びおにぎりを頬張るが、外人さんには少々馴染みがない梅

を口にして、その酸っぱさのあまり表情を歪めた。

「き、貴様〜！ 謀ったなあ！」

ポカポカ、と俺に八つ当たりし始めたイリヤの口周りには案の定、米粒が付きっぱなしで怒られているのも関わらず俺は思わず笑ってしまった。

さて、そろそろ潮時かな。俺もこんな事している場合じゃないしな……。

イリヤに人質（？）として捕らえられていたプリントの束を回収して、徐に立ち上がった俺は生徒会室がある時計塔に向けて歩き出した。

すると、イリヤがグイッと俺の制服の裾を引っ張ってそれを妨げる。

「まだ、何かあるのか？ 俺はこう見えて忙しい身なんだが……」

「……逃げるつもりか？」

「は？」

「逃げるつもりかと聞いておる」

少し語気を強めて繰り返して述べたイリヤの言葉に俺は正直何の事を指しているのが理解出来ずに呆けてしまった。

「あれだけ我の事を愚弄しておいて謝罪もなしにどこかへ行こうなど断じて許さん！」

俺にからかわれた事が気に障ったのかイリヤは憤りを感じずにいられないと軽く拳を握っていた。

ふむ、少々やり過ぎてしまったか……。

「すまん！」

深く頭を下げて俺はイリヤに謝罪した。

当の本人はまさか俺が素直に謝罪をするとは思っていなかったよ

うで目が点になって呆けていた。

やる事やったんだし、これでいいだろう。

俺は気を取り直して時計塔に向かって歩み始めようとした所、またイリヤに制服の裾を引っ張られて妨げられてしまった。

「何だよ」

「……騙されんぞ」

「はい？」

「この国では誠意を込めた謝罪の事を『土下座』と申すらしいな。じゃが、お主がやったのはただの会釈じゃ。よって、先ほどの謝罪は無効。本当に反省しているのなら今すぐひざまずいて土下座とやらをやって見せよ！」

フフーン、と少し誇らしげに語ったイリヤの姿に俺は額を押えて嘆息を吐いた。

何、仕様もない事を知っているんだよ……。

「断る！」

「何故じゃ！」

「いや、土下座するほどの大罪を犯した覚えがないんでね。じゃ

俺はこれで——」

「行かせん！」

俺が時計塔に向かおうとしたらイリヤが目の前に回り込んで来てこれ以上先に行かせんとゴールキーパーみたく両手を大きく広げて妨害して来た。

「この先に行きたいのなら我を倒して行くが良い！」

「……ああ、そうするわ」

お言葉に甘えて俺はゆっくりとイリヤに近づいて行き、俺の行動に身構えたイリヤの無防備となった額に手を伸ばして力の限りのデコピンをかましてやった。

パチーン、と思いのほか綺麗にクリーンヒットしたせいでイリヤは額を押えながら身悶える。

「い、痛いではないか。阿呆……」

涙目になりながらイリヤは俺の事を軽く睨み返して来た。

「いや、倒してから行けって言うもんだから俺はその言葉通りにやっただけなんだが……」

「手加減を知らんのか、手加減を……」

「じゃゝ倒したから俺は先に進むぞゝ」

額を押えながら未だに痛がり続けているイリヤを後目に俺はさつさと時計塔に向かって歩き出した。

「ま、待て！ まだ、終わつとらんぞ！」

後方からそんな怒鳴り声が聞こえて俺は嘆息を吐きつつ、渋々ながら後ろを振り返ってやった。

「まだ、何かようですかゝ？」

「何じゃ、その面倒臭そうな対応は！」

「……実際、面倒臭いし」

「なあゝにゝゝおおゝ！ こうなったら我も本気を出す！ あとで吠え面をかいても知らんぞ！」

ブンブン、と怒号を上げながらイリヤは唐突にドレスの裾をたくし上げ、ガーターベルトで止めたひざ丈ほどのストッキングの隙間から手のひらサイズの白い棒状の物を取り出して、それで地面に何かを描き始めた。

その様子からイリヤが取り出したのはチョークだと理解したのだが、一体彼女が何をしようとしているかまでは分からなかった。

すると、描き終えたのかイリヤが徐に地面に描いた円陣（恐らく魔法陣）の中心部分に立ち止まって不気味な笑みを浮かべながらこちらに視線を向ける。

「……ククク。まさか、下等種ごときにこれを使う時が来ようとは正直思いもよらなかったぞ」

「えっと……もう、行つていいかな？ そろそろ予鈴になるだろ

うし」

「フッフ、我の本気の姿にビビっておるわ」

「いや、そうじゃ——」

「言わずとも分かつておる。じゃが、我を愚弄した罪、その身に刻んでくれるわ」

不気味な笑みを浮かべながらイリヤは徐に眼帯を外した。眼帯で隠されていた左目が露わになり、左目はエメラルドグリーンではなく己の髪の色と同じく金色に輝く穢れの無い瞳の色だった……。

「——我、ここに汝の御霊を呼び出さん。我の言霊に応えよ。我の望みを叶えよ。出でよ、地獄の門番ケルベロス！」

イリヤが謎の呪文を唱えた瞬間、辺りが静まり返り突風が吹き始めた——ような気がした……。

「……」

「……」

「——我、ここに汝の——」

「じゃゝなゝ」

「ま、待つのだじゃ！」

「もう、いいだろ？ 十分、相手してやったんだ。解放してくれよ」

「まだじゃ。今のはただの余興じゃ。これから本番、よく目に焼き付けるが良い！」

そう豪語したイリヤはゆっくり深呼吸をしてから右手でこの形を作った指を口に近づけて指笛を吹いて——吹いて、吹いて、吹いて……？

イリヤが指笛を吹く度にプシュー、と空気が抜ける音が鳴り響いてなかなか綺麗に指笛が鳴らず、徐々にではあったがイリヤの目がうるつると涙目になりつつあった。

「分かった。イリヤの気持ちは痛いほど伝わったからさ、もう無

理すんな」

「む、無理などしちよらん……」

声を震わせながら頑なに指笛を吹き続けるがやはり綺麗に鳴らす事は出来ず、憐れに思った俺は彼女が吹くタイミングに合わせて気付かれないよう指笛を吹いてやった。

すると、左方の草陰からガサガサと草が揺れ動く音が鳴り、そこから黒い物体が飛び出して来て、イリヤの腕の中に収まった。

「や、やった！ 成功じゃ！」

「お、おー！ おゝ？」

突然の事で俺は驚いてしまったが、よくよく見てみるとただの黒いチワワだった。

「ククク……。だから言ったではないか、吠え面をかく事になると……」

召喚に成功（ほぼ、俺のおかげだが……）して本来の調子を取り戻したイリヤが俺の呆けた姿を見て、不気味な笑みを浮かべながら見下して来た。

「まあ、確かに驚いたけどさ、チワワって……。せめて、地獄の門番ケルベロスって名前負けしないよう、そこはドーベルマン辺りが妥当だろ」

「ドーベルマンなぞ、こわ——ゴホン、チンケではないか。チワワこそ高貴なる我に相応しい召喚獣よ」

「ああ、確かに……。地獄の門番どころか自宅の門番すら出来なさそうな所がお似合いだよ」

「ば、馬鹿にしよう……。八つ裂きにしてくれるわ。行け、ケルちゃん！」

「わん！」

イリヤの掛け声でケルちゃんこと黒チワワが彼女の腕から飛び出して来てこちらに向かってトコトコ、と歩み寄って来た。

ハアハアハア、とどこことなく寧猛そうな息遣いをしながら俺の事をつぶらな瞳で見つめるケルちゃんに少し気後れしたが、めげずに立ち向かう事にした。

まず、初めに俺は中腰になってケルちゃんの事を凝視した。ケルちゃんのつぶらな瞳に負けないよう目をずっと見続けてやった。頃合いを見て、俺は徐に右手を差し出した。

「お手！」

「わん！」

ポン、と俺の右手に前足を乗つけてくれたのを見て、続けざまに今度は左手を差し出してみた。

「おかわり！」

「わん！」

また、俺の左手に前足を乗つけてくれたケルちゃんに俺は——俺はっ！

「可愛いな、コノヤロー！」

頭を撫でたり、抱きついたりと某畑さんほどじゃないけれど、それなりの熱いスキンシップをケルちゃんに施してしまった……。

「わ、我のケルちゃんがあ！」

俺たちの熱い間柄に嫉妬したのかイリヤが膝を着いて悔しそうに唇を噛みしめる。

「はっはっは。ケルちゃんはお前じゃなくて俺を選んだようだ」

「ムムム……。こうなったら、奥の手じゃ！」

「……まだあるのかよ」

イライラしながらイリヤは懷から着痩せしていたにも程がある、枕ぐらいの大きさのツギハギだらけで目がボタンになっているクマのぬいぐるみを取り出して、それを大事に抱きかかえたイリヤは、

「――Establishment of the soul（魂の定着）」

と、念を込めるように呟いた。

すると、イリヤに抱きかかえられていたクマのぬいぐるみが腕から飛び出して独りでにとぼとぼ、と歩き始めた。

それを見たケルちゃんは怖気づいて俺の足元に隠れ、俺はあまりの事に目を見開いて驚いてしまった……。

ぬいぐるみが動いている？ でも、ただのパペットだろ？ 何らかのトリックで動かしているに違いない。

クマのぬいぐるみが動く仕組みに悩んでいる俺を嘲笑うかのようにイリヤは不敵な笑みを浮かべながら見つめていた。

しかし、そんな優越感も束の間。クマのぬいぐるみの動きが突然、止まった……。

それを見てすぐにぬいぐるみを回収したイリヤはぬいぐるみを抱きかかえながらこちらを見据えた。

「ど、どうじゃ。恐れ入ったであろう？」

「ああ、恐れ入ったよ。どういう仕組みで動いてたんだ？」

「ちつつち。それは秘密じゃ。何ならもつと凄い物も見せてしんぜようぞ」

誇らしげにそう語るとイリヤはぬいぐるみに耳打ちをし始める。

しばらく、その様子を見届けていると準備が整ったのか、イリヤが口を開いた。

「待たせたな」

【待ちやせたな、下等ちゅ】

「は？」

ぬいぐるみがしゃべったのか……？

【我が主の力にビビっておるわぁ】

「そう言うでない。ベアトリーチェよ。我の偉大さがいけないの

じゃ。偉大すぎるのも難儀じゃのお」

【ケラケラケラ】

「……」

何？ このしょぼいコントは……。どうせ録音した音源を再生してるだけだろ。それに出だし早々噛んでるし……。はぁ。驚いて損したわ……。

「なあってイリヤ。一つだけ聞きたい事がある」

「な、何じゃ？」

「お前……友達いないだろ」

「ぐっ……。お、おるわい！ 友人の一人や二人、百人や千人。

ワールドワイドに展開しておるわ！」

「そうか……。なら、携帯貸せ。ワールドワイドに展開しているぐらいなら携帯の登録件数はびっしりのはずだろ？ まさか、ワールドワイドに展開している奴が携帯の一つも持ってないって事はないよな？」

「……承知した」

渋々ながら了承したイリヤは腕の裾から携帯電話を取り出して俺に投げつける。それを受け取った俺はイリヤの携帯をイジって登録番号を確認する。

すると、自宅の電話番号と両親の電話番号らしきもの、それと身に覚えのある電話番号の四つしか登録されていなかった。

「……」、「これで満足か」

身体を震わせながら呟いたイリヤの姿を見て、俺は徐に自分の携帯をポケットから取り出して勝手に赤外線通信を使用して連絡先を交換した。

「な、何をしておる」

「いや、何となくな。ほら」

連絡先を交換し終わったイリヤの携帯を彼女に向かって軽く投げ
て、それをイリヤは受け取ると本当に連絡先が交換されたのかと、
慌てた様子で確認し始めた。

「……しんどう、しん？」

「ああ。それ俺の名前な」

「まさか、彼奴の……？」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、なんでもない。なんでもないぞ、シン」

「そうかい」

すると、突然辺りに大きな鐘の音が鳴り響き、その音に俺は思わず額を押えてしまう。

「アチャ」。予鈴が鳴ってしまった。おい、イリヤ」

「な、何じゃ？」

「それ、全部やるからさっさと教室に戻れ。俺は行かなきゃなら
ん所があるから、もし何か用事があるなら携帯に遠慮なく掛けてこ
い。じゃー俺は行くから」

摺木に頼まれたプリントの束を大事に抱えて俺は生徒会室がある
時計塔に向かって走り出した。後方からベアトリーチェの声で「あ、
ありがと」と言う言葉に見送られながら……。

第一話　く久しぶりの登校　其の四

——時計塔内部。

初めて時計塔に足を踏み入れた。

石造りの壁伝いに古めかしい木製の階段が上層部へと続く、吹き抜けの空間。大きな振り子が左右に揺ら揺らと動きながら時を刻んでいた。

俺は天を仰ぎながら「遠いなあ」と、弱音を吐きつつ階段を上り始めた。一段一段、足を踏み込む度にギシギシとしなる音が鳴り、足場を確かめるよう慎重になった。

これ、ホント大丈夫だよな……。

恐怖心を抱きながら一步一步、出来るだけ体重を掛けないよう上る事、数十分あまりが経過した頃、ようやく最後の踊り場が見えてホッとする。

そして、赤いじゅうたんが敷かれた道を道なりに進むと見えて来た焦げ茶色の大きな両開き式の扉。その上に「生徒会室」と木彫りされた物が飾っており、扉の取っ手の部分が黄金に輝きくすむ事無く十二分に磨かれていた。

扉の前に立つた俺は息を整えて、扉をノックしようとしたら中から、

「なあゝいいだろ？」

「だ、ダメだって……」

「そう言いながら、お前——」

「ち、違うんだ。これは……」

「何が違うってんだ？ ほら」

「——はう……。やめっ！」

「やめない。だって、こんなにも喜んでいるじゃないか」

「やめっ……。ホント、ダメだって……」

「息が荒いぞ？」

「そ、んな——事、ない」

「フッフ、正直な奴め……」

と、中から甘美な男たちの声が聞こえた。

えっと……。うん、そういう世界もある、よな……。

俺は胸に手を置き、ゆっくり目を閉じて感慨深く頷いた。その最中も中からは甘美な男たちの声が艶めかしく聞こえて来ていた……。

さて、どうしたものか……。お邪魔するもんなんだし、ここは一度教室に戻るつてもありだな。うん、そうしよう。

気配を消して気付かれないよう抜き足差し足忍び足で引き返している、

「っ——はあ、いい！　そこお、いいっ！」

と、盛り上がっているのか中から大声で甘美な男のこ——いや、息遣いの荒い艶めかしい女性の声が聞こえて来て、俺は思わず足が止まってしまった。

……中では一体、どんなプレイが繰り広げられているんだ？

気になった俺は扉の傍まで戻り、状況を考察してみた。キャストは男二名、女一名の計三名で、何らかの熱い宴が生徒会室の中で繰り広げられているって所か……。

ふむ、ちよつとだけならいいよな？　うん、そうだ。これはいわ

ゆる保健体育の——そう、社会見学のようなものだ。大切だよなあ

く社会見学は……。

学習のため、俺は音を立てないように扉をゆっくり開けてその隙間から中を覗いてみた。決して下心で覗き見る訳ではない事をここに誓おうと思う。

隙間からはソファアに腰掛ける、衣服が乱れ綺麗な淡茶色の長髪美人系女子生徒が見えた。その女子生徒のたわわに実った果実を優

しく包み込む艶やかな包装が少し外れかかっており、水滴したたる瑞々しい果実がこぼれ落ちようとしていた……。

女子生徒はそんな事をお構いなしに荒々しい息遣いでブラウスの襟をくわえながら、舐め回すように下方に伸ばした腕を艶美に動かす。腕を動かす度に漏れる女子生徒の吐息がほとばしる中、男たちのボルテージが上がった甘美な声が生徒会室に響き渡る……。俺はその光景に瞬きをする事を忘れ、溢れ出て来る生唾を飲み込む事で精一杯だった。

——何て言うか、パッションの一言に尽きるな……。

しかし、女子生徒の姿は確認出来たが……声だけで男たちの姿が見えなかった。なら、もう少しだけ、もう少しだけ扉を開け——あ……。

欲張り過ぎたせいか思いのほか力が入ってしまい扉がほぼ全開状態になった。先方は夢中になり過ぎていてまだこちらにお気付きになっっていなかったが、俺はもう隠れミノが無くなった状態でさらされてしまった。

やべ、早く隠れないと——あれ？

俺はある違和感に気付いてしまった。いや、気付かざるを得なかった……。

生徒会室にはソファアに腰掛ける衣服が乱れ、たわわに実った果実がご自慢のワガママボディーの美人系茶髪女子しかおらず。その少女は収納式の巨大モニターをとろける様な眼差しで見つめていた。

ああ、そういう事ね……。

カラクリが分かり俺は思わず、腕を組んで頷いてしまった。その行動が油断大敵であった事は間違いなかった。頷き終わった俺が前方に視線を戻したその時、モニターの映像を恍惚な眼差しで見つめ

ていた少女が感極まったあまり、艶やかな流し目を決め込んでいた最中に俺と目が合ってしまった。

さすがの少女も俺の姿に気付いたのか目を見開きながらこちらを二度見して来て、お互いフリーズしてしまう。フリーズをしている最中もモニターの中で繰り広げられている男たちの熱い宴による甘美な声が生徒会室に木霊する……。

「……」

「……」

「っん、はあゝ。い——」

「続けるな、続けるな」

何事もなかったように——いや、現実逃避のように己の欲に走った少女の事を俺は全力で制止にかかる。

その際、もつれてしまっただけで言うまでもなく俺がソファアの上に少女を押し倒した構図が出来上がってしまった。

乱れた衣服から見え隠れする少し汗ばんだ柔肌、そしてたわわに実った果実を少女が恥じらいながら両腕を駆使して隠そうとはしているが逆にそれがアダとなり、果実が自己主張していた。鼓動を乱しているのか、彼女の吐息がほんのり朱に染まった艶やかな口唇から漏れる。

それを間近でほんの数センチの所……真上から見下ろしている俺は彼女と目が合ったままお互いに何も語る事無く、沈黙の時間が続いていた。

すると、何を思っただけ少女が果実を隠していた右腕を離して、その人差し指で自分の唇に付けるとそのまま俺の唇にマスク越しからなぞる様に擦りつけて来る。

「——優しくしてね」

ウインクをしながら色っぽく発せられた言葉に俺は——俺はっ！

「——はあゝ。服を直せ、服を……」

頭を掻きながら少女から身を引いて距離を取った。

少女は俺の言葉通りに乱れた衣服を正して、モニターの映像を消した後にこの生徒会室の中で一際目立つ立派な机に向かってゆつくりと腰を掛けた。

はあゝ。どつと疲れた……。

倒れ込むように俺はソファーに腰を掛けて、少し辺りを見渡す。

生徒会室つて割に備品が充実しており、彼女が座った後方にはテラスがありそこから下界の様子を窺えるようだ。

「えつと——アナタは確か、高等部二年二組の新堂慎くんだったかしら？　麻耶ちゃんの幼馴染の……。高等部一年三組にいる実妹の新堂杏ちゃんとの近親相姦が噂で他校との女子生徒も何人かを手玉に取り。日にち、曜日、天気、気分によって女の子をとつかえひつかえしている……」

先ほどの事がなかったようにおとりした口調で少女は俺の顔をまじまじと見つめながら有らぬ事を言いだし始めた。

「違うわい。それはそうと何で俺達の名前を知っているんだ？」

「それはごく当たり前の事だと思いますよ。私はこの学園の全校生徒たちを統治する生徒会長ですからね。生徒会長たるもの全校生徒の名前を把握しないでどうしますか。常に生徒たちの鑑であり続けなければなりません。生徒会長という職務はね……」

「……その生徒たちの鑑たる生徒会長殿はこの神聖なる生徒会室で先ほど一体何をご覧になって、一体何をしていたんでしょうな。お答え願えますか？」

「——ほ、ホットヨガですわ。いやですわ。オホホホ……」

「全世界のインストラクターから苦情が来るぞ、おい」

まあゝある意味、ホットな気分になるからあながち間違いでもない、か……？

そんな事を言っていると俺にまで飛び火するな……。

「それはそうと、新堂くんはどうして生徒会室に？」

「ん？ ああ、これを届けに——」

ソファーから立ち上がった俺は摺木に頼まれたプリントの束を会長に手渡し、受け取った会長はプリントの束をまじまじと見つめた。

「——報告書、ですか。どうして役員でもない、新堂くんが？」

「摺木に頼まれて……」

「麻耶ちゃんに、ね……。その麻耶ちゃんは役員としての仕事をほったらかしてどこに行っただのかしら？」

「えっと……とある男子生徒から没収した品を持ってどこかに消え——あつ」

「？」

俺は話の途中で会長の後方に広がる景色に注目してしまった。そして、徐にテラスに出て手すりに沿って進み、部屋の中から気付いたあるモノを凝視した。

校庭がある方角からボヤのような黒い煙がもくもくと出ているのに気付いたのだ。それを親指を嚙んで見つめていると、俺の肩をポンと叩きながら背後から会長が現れた。

「どうかしたの？」

「いや、何でもない」

「そう？ でも、少し物寂しそうな表情を浮かべているけど……」

「いや……ホント、何でもない」

「ふむ。だけど、おかしいわね。今日は焼却の日じゃないのに……誰か使っているのかしら？」

会長も校庭がある方角から黒い煙が出ているのに気付いたのか、煙を見つめながら首を傾げていた。

はあ、焼却処分されちゃったか……。同志たちよ、すまない。お前らの気持ちはしっかりと俺の胸に響いているぜ……。

少し気落ちしてしまった俺は徐に視線を下界に向けた。すると、

黒い服装の人物とジャージ姿の人物が中庭におり、ジャージ姿の人物が黒い服装の人物に指さしながら何か指示をしていた。その指示に渋々ながら従う黒い服装の人物が滑稽で少し笑ってしまった。

「何かおかしい事でもあったの？」

「ただの思い出し笑いだ。そういえば、摺木の事を『麻耶ちゃん』で、呼んでいるがそんなに仲がいいのか？」

「仲が言いも何も、会長と副会長の仲ですからね。それなりにコミュニケーションは取れている方だと思いますよ」

「え？ アイツ、副会長だったのか？ いや、アイツならそれぐらいの職務を請け負っていても不思議じゃない、か……」

「フフフ。よく見ているんですね」

お上品に口元を隠しながら微笑んだ会長に俺は照れ隠しの要領で頭を掻いた。

「つたく、余計な事を言ってしまった……」。

「たまたまだ。たまたま……。それにアイツのデキならやっていてもおかしくないと誰でも思う事だろ？」

「ふむ、そういう事にしておきましょう」

俺の弁解も虚しく会長は手を合わせて微笑みながらそう口走った。はあ、これは明らか誤解されてしまったよなあ。

少し陰鬱ながら俺は摺木の頼まれ事を無事済ませて、もう用がなくなった生徒会室を出ようと出口に向かって足を進めていると、

「あら？ もう行くのですか？」

後方からまったりとした口調で会長に声を掛けられた。

「もう授業が始まってるだろうから、早く戻らないと——って、会長こそ教室に戻らなくてもいいのか？」

「私は生徒会長ですから大丈夫です。それぐらいの優遇をされても罰は当たらないでしょ？」

「……職権乱用だろ」

彼女の発言に額を押えたが、生徒会長の特権に少し嫉妬してしまった……。

「ああ、そうそう。まだ、すっかりと自己紹介していませんでしたね。私は高等部三年一組——望月愛莉もちつきあいりです。ふっつか者の生徒会長かも知れませんが……共にこの学園を良くして行きましょう。新堂慎くん」

思い出したかのように突然、微笑みながら自己紹介すると会長は徐に俺の手を握って来て軽く握手をする形になった。

って、俺は先輩に向かって終始タメ口を使っていたのか……。でも、あの光景を目撃してしまったら先輩だろうとタメ口になっちゃうよな……。でも今度、会う時は気を付けないと。まあ、会う事があつたら話だが……。

「それともう一つ——」

人差し指で一と示した後、不意に会長は俺に抱きついて来た。突然の事でどうしたら良いか分からず俺はそのまま会長に身を委ねる。

「先ほどの事は、二人だけのヒミツですよ」

俺の耳に会長の吐息がダイレクトに掛り、その反動で俺の鼓動が高ぶった。

耳打ちを済ませた会長は俺から身を引き、二人だけの秘密と言う事を強調したいのか徐に人差し指を自らの口元に近づかせて「シ」と見せつけて来た。

会長の一挙一動にドキドキしながらも彼女がふっかけて来た願いの返答——と言えは返答かも知れないが俺は会長に「了承した」と敬礼で示し、生徒会室を後にした。

もちろん、あの恐怖の階段を下らなければならぬ事は言うまで

もないが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274ba/>

ツレヤン...？

2011年12月31日22時52分発行